伊勢湾周辺地域の磨製石包丁、若しくはその象徴性

加藤安信

Ⅰ．はじめに

稲作農耕において、米の収穫作業は一連の生産活動と作業工程の最後の段階にやってくる。このため、収穫作業には生産者の労苦や喜び、感謝などの様々な想いが凝縮されており、収穫期は農耕民の一年の生活において最もリズムが高揚し、緊張感が高まっていく時期であるということができる。たとえば、1993年に日本の東北地方を中心にして発生した冷害時に現れた諸現象を例にとってみても分かるように、極端な不作は米作り最後の収穫段階で生産者に対して大きな失望と落胆とを与え、そのことが原因となって社会生活の他の分野へも様々な影響をもたらしていく。豊作は生産者に喜びを、そしていっぽう不作は深い悲しみを与えるのである。このことは極めて単純なことであって、時代を遡れば上るほど収穫時における生産者の気持ちはより素直にかつ素朴な形態で表現されていたであろうと考える。

弥生時代の石包丁は、収穫用穂摘具として大陸系磨製石器の一群に含まれてわが国にやってきた農具の一つである。石包丁については、古く1930年代の森本六爾（1934）や小林行雄（1937）による研究が始まって以降、東アジアの中での日本稲作の系譜を捉える資料として扱った石毛直道(1968Ａ・Ｂ)、同じく中国・朝鮮・日本の資料の形態分類によって稲作起源の問題を追求した下條信行(1980)、他の石器をも含めた組成から地域・集団の生業形態や社会構造を問題にした酒井龍一（1974、1986、1989)、使用痕分析に基づいた石包丁の使用法の解明を進めた御堂島正（1989Ａ・Ｂ・Ｃ、1990、1991、1993）らによる業績が積み重ねられてきた。またこの他に、野本孝明（1989）や斎野裕彦（1993）らによる東日本地域を対象とした地域的研究や、埋蔵文化財研究会（1992）による全国的な大陸系磨製石器の集成と分析があり、いずれも石包丁についての基礎的理解を進める上で意味を持っている。

しかし、それにしても磨製石包丁は謎めいた石器の一つである。分布の偏りと地域的希薄性、石材選択の共通性などの古くて新しい問題が未だに残されている。本稿では、上記の諸業績に依拠しつつ、これまで資料提示不足の感が否めなかった伊勢湾周辺地域における磨製石包丁の出土状況を再整理すると共に、不定形刃器あるいは横刃形石器と呼ばれる石器との関わりや分布の希薄性の〈意味〉、その象徴性について考えるものである。

Ⅱ．伊勢湾周辺地域の磨製石包丁と打製刃器

Ⅱ－１．磨製石包丁の分布と量

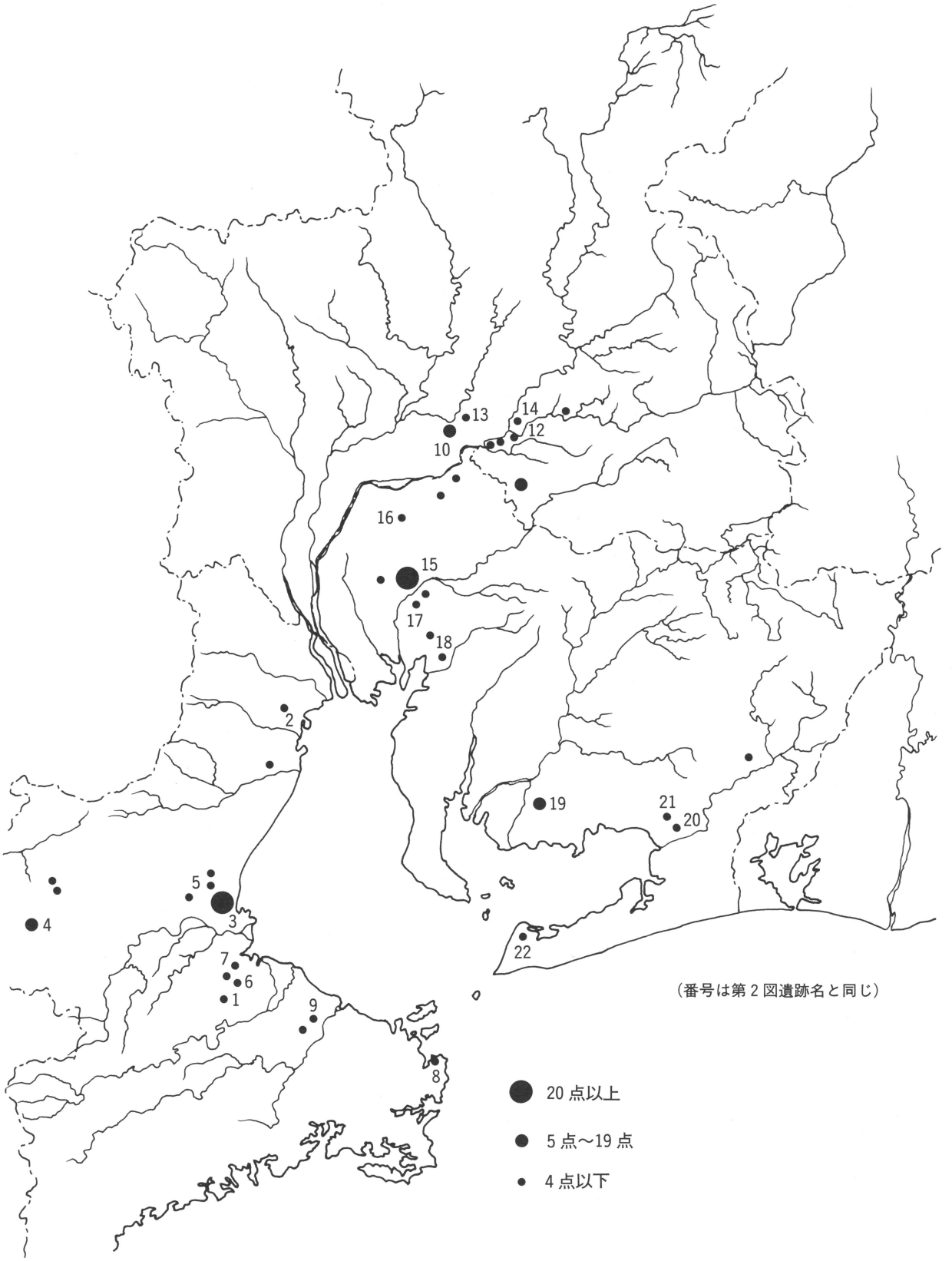
まずはじめに、これまでに伊勢湾周辺地域に属する三重、岐阜、愛知の３県内から出土または採集された資料を一覧してみる（表１、第１図)。不明確な部分もあるが、合計で207点ほどが知られている。

三重県では、伊勢平野最古の弥生集落の一つである納所遺跡から図示した７点を含め45点が出土しているのを始めとして、16遺跡から72点ほどが発見されている。その多くが、津市、松阪市、鳥羽市などの伊勢平野に立地する遺跡に限られている点に分布上の特色がある。このうち杉垣内遺跡と山籠遺跡から出土した各１点と納所遺跡の２点の計４点は大形の磨製石包丁である。

表Ⅰ．伊勢湾周辺地域の石包丁類一覧表

出土地	遺跡名	点数	磨製	打製	石材	時期	備考
三重・四日市市	永井	2		2	黒色頁岩	前・中	市教委1973
三重・伊勢市	中楽山	1	1		緑色片岩	後	県教委1973
三重・津市	納所	7	7		—	前・中	破片も含め45点
		(うち2点は大形)					県教委1980
三重・津市	山籠	1	1(大形)		結晶片岩	Ⅳ	県教委・センター1990
三重・津市	長	1	1		—	Ⅳ	市教委1989
三重・松坂市	杉垣内	1	1(大杉)		緑泥片岩	Ⅳ	
		(他に不定形刃器あり)					
三重・松坂市	堂ノ後	3	3		緑色片岩	Ⅳ・Ⅴ	〃
三重・松坂市	浦早崎	4	4		粘板岩	—	市教委1992
三重・松坂市	久保南組	1	1		—	前	東海の先史1981
三重・鳥羽市	白浜	1	1		塩基性結晶片岩	後	調査委員会1990
三重・鈴鹿市	中尾山	1か			—	中	県センター年報1990
三重・上野市	澤田	1	1		粘板岩	後	県教委・センター1991
三重・上野市	森脇	1か			—	中・後	県センター年報
三重・名張市	下川原	8	8		—	Ⅳ	市調査会1986・90
三重・安濃町	平田古墳下	1	1		結晶片岩	Ⅱ	町調査会1987
三重・一志町	馬ノ瀬	2	2		緑泥片岩	Ⅳ	調査会1991
三重・玉城町	赤垣内	2	2		—	後か	県教委1979
岐阜・美濃加茂市	尾崎	1	1		粘板岩	後	きずな6号
岐阜・美濃加茂市	今	1	1		凝灰質砂岩	後	県・市教委1979
岐阜・美濃加茂市	信友	1	1		—	—	東海の先史・総括
岐阜・美濃加茂市	欠ノ上	1か	1か		—	後	きずな6号
岐阜・美濃加茂市	牧野小山	2		2	—	Ⅲ	県・市教委1973
岐阜・各務原市	炉畑	1か		1か	安山岩	樫王	市教委1973
岐阜・可児市	北裏	1	1		—	Ⅲ・Ⅳ	調査団1973
岐阜・可児市	宮之脇	3	2	1か	粘板岩2、?1	Ⅳ主	県・市教委1976
岐阜・可児市	藤之井北	2	2		—	—	東海の先史・総括
岐阜・多治見市	根本	5	4	1	粘板岩	Ⅲ	県・市教委1991
岐阜・関市	大杉	6	6か		—	Ⅲ	東海の先史・総括
岐阜・富加町	半布里	3	2	1	—	Ⅳ	県教委1981
岐阜・上村	辻見堂	1(不定形刃器か)			—	後	東海の先史・総括
岐阜・御嵩町	比衣	1	1		—	—	国学院大紀要5
岐阜・八百津町	六ノ坪	1カ	(手鎌)		—	Ⅲ	東海の先史・総括
岐阜・青墓村	牧野	1カ			—	後	〃
愛知・名古屋市	名古屋城三の丸	1	1		頁岩	中	センター1990
愛知・名古屋市	西志賀	1	1(石鎌)		—	前	東海の先史・総括
愛知・名古屋市	富士見町	1	1		—	—	川合剛氏教示
愛知・名古屋市	見晴台	1	1		緑色頁岩	後	市教委1978
愛知・犬山市	上野	1	1		—	中	石黒立人氏教示
愛知・一宮市	元屋敷	8(横刃形石器)			—	Ⅰ	市史資料編1967
愛知・一宮市	山中	1	1		頁岩	前か	センター1992
		(他に不定形刃器4点)					
愛知・一宮市	町屋	1	1(手鎌)		—	中・後	東海の先史・総括
愛知・清洲町	朝日貝殻山	1	1		—	前	県教委1972
愛知・清洲町	朝日	1	1		緑色千枚岩	中・後	県教委1975
愛知・清洲町	朝日	25	25		緑色千枚岩9、凝灰質頁岩源千枚岩6、凝灰質砂岩4、頁岩3、珪質頁岩3	中・後	県教委1982
		(他に不定形刃器38点)					
愛知・清洲町	朝日	58	58		—	中・後	センター1993
		(他に光沢を持つ粗製剝片石器27点)					
愛知・清洲町	二反地	1	1		—	—	
愛知・春日町	朝日	1	1		—	—	村教委1974
愛知・甚目寺町	阿弥陀寺	不定形刃器67				中	センター1990
愛知・甚目寺町	森南	1	1		緑色片岩	中・後	町教委1990
愛知・大口町	向江	1	1		粘板岩	後	町教委1980
愛知・西尾市	岡島	11	11		塩基性凝灰岩10、緑色片岩	中・後	センター1990
愛知・西尾市	岡島	2	2		緑色片岩、紅レン石片岩1	中・後	センター1993
愛知・豊橋市	瓜郷	2	2		緑泥片岩	中	市教委1963
愛知・豊川市	麻生田大橋	3(横刃形石器)			—	縄晩か	市教委1985
愛知・新城市	南貝津	2	1	1か	結晶片岩、緑色片岩	後	市教委1989
愛知・小坂井町	平井稲荷山	1(横刃形石器)			緑色片岩	前か	町教委1992
愛知・小坂井町	篠束	2	2		緑色片岩	中・後	町教委1960・61
愛知・田原町	山崎	1(横刃形石器)			硬砂岩	後	町教委1993
愛知・渥美町	小森	1	1		—	—	

（注）この表は主として調査報告書に基づき作成した。



第１図　伊勢湾周辺地域における磨製石包丁等出土遺跡分布図

岐阜県では、根本遺跡や宮之脇遺跡、藤之井北遺跡などで複数出土が認められる他は、殆ど単数出土に留まっている。管見に及んだ範囲では12遺跡21点ほどとなっていて、野本（1989）が述べるような東海３県のうちで最も多い状況を示しているわけではない。むしろ、その逆となっている。分布の中心が可児市や多治見市、美濃加茂市などの木曽川中流域にある点に特徴があり、濃尾平野の低湿地に立地する遺跡からは殆ど認められてはいない。

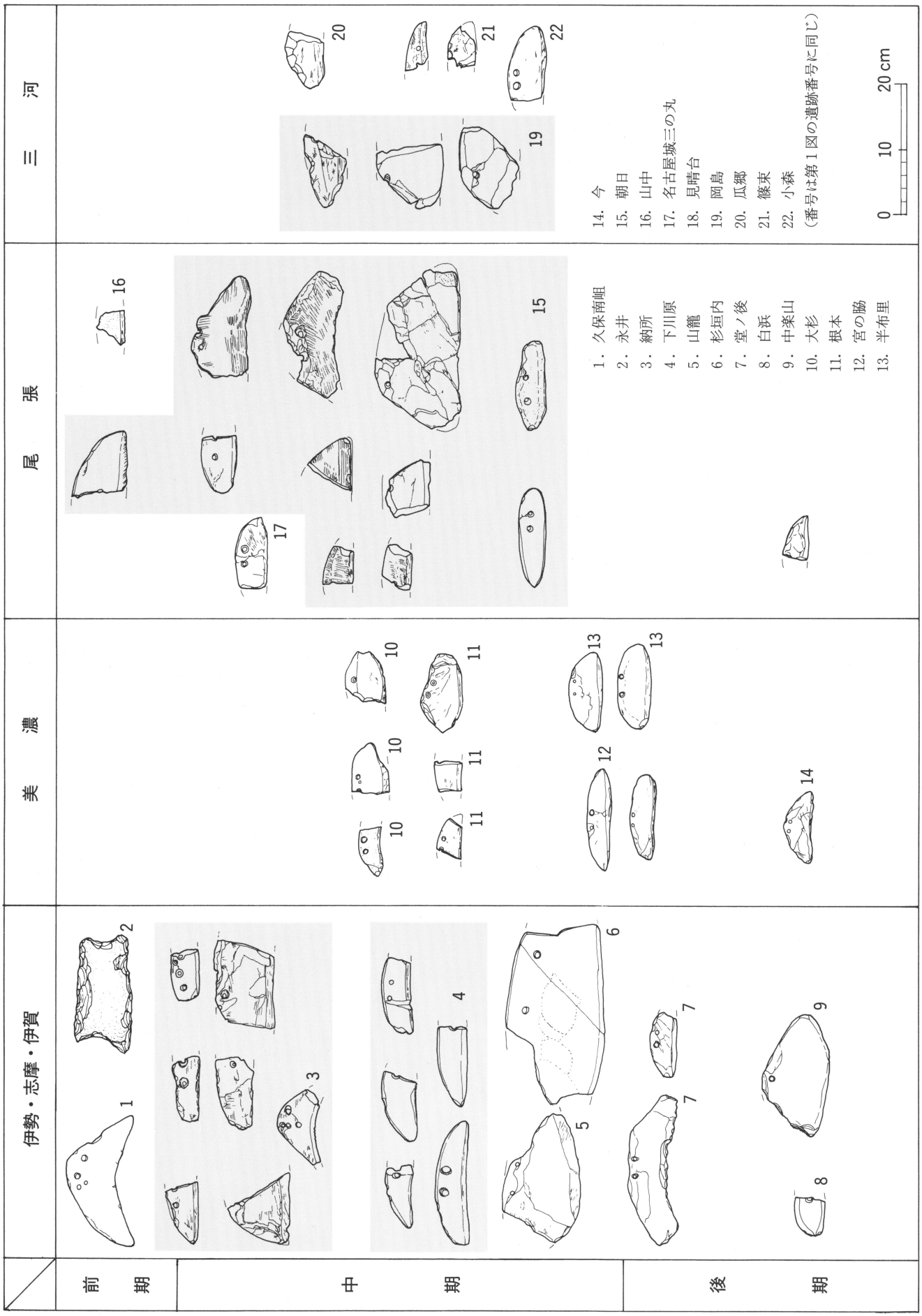
愛知県内では14遺跡から114点ほどが確認されているが、なかでも朝日遺跡からの出土量が群を抜いている。朝日遺跡では、これまでに破片・未製品を含めて87点の出土がみられ、県内出土のおよそ75％を占めるに至っている。90,000㎡に近い広い面積が調査されたという点に留意を払うのはもちろんのこととしても、このような多数の磨製石包丁を出土すること自体が、伊勢湾周辺地域における朝日遺跡の位置を極めて特異なものにしているのである。尾張地域では、これを除くと、濃尾平野沖積地、名古屋台地上立地とを問わず、単数出土しかみられない遺跡が殆んどとなっている。

いっぽう、三河地域では、矢作川下流域の環濠集落遺跡である岡島遺跡から13点が発見されてはいるものの、出土遺跡は瓜郷遺跡や篠東遺跡、小森遺跡など極めて少数に限られている。集落の中心部分の調査ではなかったにもかかわらず岡島遺跡からの出土点数が多くなっているのは、朝日遺跡の場合と同様に、26,000㎡にちかい広い面積の調査が行われたことに因るところが大きいとみられる。尾張地域に比べて、三河地域でその分布が希薄になっている現象は、磨製石包丁の広がりが静岡県内を始めとする東海東部地域から関東地方にかけて殆ど見られなくなっていく状況に通じていくものである。

II－２．形態と時期

単純で明快な森下英治（1992）の分類（基本的には石毛、下條の分類と同一）に従って、破片状態のために形態分類が殆んど不可能な資料を除いて、第２図に示した51点のみに限って分類してみると、外湾刃直背形態（A形態）０点、外湾刃丸背形態（B形態、杏仁形はここに含める）１点、直刃丸背形態（C形態）47点、直刃直背形態（D形態）３点に区別される。ここでは、刃部がやや内湾している三重県久保南岨遺跡や納所遺跡、堂ノ後遺跡、愛知県朝日遺跡の計５点の資料については、刃部研ぎ直しによる結果と考えて直刃丸背形態に含めた。全体的な傾向として、圧倒的に直刃丸背形態の多いことが窺い知れる。外湾刃丸背形態は朝日遺跡、岐阜県尾崎遺跡から各１点出土しているのみであり、また、おおよその全形を窺いうる直刃直背形態も納所遺跡で数例が認められているにすぎない。朝日遺跡から得られた破片資料の２、３点もあるいは同類に含めてよいかも知れない。さらに、朝日遺跡からは直背を呈した資料が１点出土しているが、欠損部分が多いため、これを外湾刃直背形態と認定することはややためらわれる。したがって、外湾刃直背形態の確実な出土例は、現状による限り伊勢湾周辺地域では認められてはいないと考えた方がよい。他に、丸背部分の中央が盛り上がり三角形に近い状態を呈している大形品が、三重県山篭遺跡（１点）、三重県杉垣内遺跡（１点）、朝日遺跡（３点）から出土している。

石包丁の所属時期の問題については、明瞭な共伴土器がみられなかったり、あるいは包含層中からの出土例が多くあったりして、その特定を困難にしている。確実な前期の資料としては、朝日遺跡貝殻山貝塚地点、久保南岨遺跡、納所遺跡出土の３資料をあげることができる。あるいは愛知県山中遺跡から出土した刃部に鋸歯状の刻みを持つものも、出土状況からみてこれに加えてよいかも



第2図　伊勢湾周辺地域における磨製石包丁の時期別分布図
（各調査報告書の実測図から作成。時期については中心時期の位置に配置してあり、実際には幅がある）

知れない。ただし、納所遺跡では中期までのものを含み、また最多量の出土をみた朝日遺跡の資料の大半は中・後期に属していて、厳密な時期細分は難しいようである。総体的にⅢ・Ⅳ期の資料が最も多く、後期では山中式期まで用いられたと考えることができる。

以上をまとめて、地域別に配列したのが第2図である。ここから、前期から後期までの分布がみられるのは伊勢と尾張の2地域のみであり、美濃地域と三河地域ではⅢ期、すなわち中期中ごろ以降になって初めて出現していることが読み取れる。現状では美濃の平地部での解明が進んではいないために、早急な結論を下すべきではないとも考えるが、大陸系磨製石器を伴った水田稲作農耕集団と技術は、伊勢の海を主たる交通路として当地域へとやってきて、まず伊勢・尾張地域に定着したとみることができる。そして、形態的には最も古い段階からみられる直刃丸背形態の磨製石包丁が一貫して当地域の石包丁の主流をなし、納所遺跡などにみられるような直刃直背形態や少例の外湾刃丸背形態の磨製石包丁が中、後期の段階でこれに加わっていく展開を示したといえる。そして遅くともⅤ期前半には消失していき、鉄製農具へと転換していったようである。

Ⅱ－3．石材の選択性

磨製石包丁の素材として、軟らかくて片理性を持ち加工が比較的容易な粘板岩や片岩系の岩石が用いられている点は、全国的に共通している。伊勢湾周辺地域で磨製石包丁の素材とされた岩石としては、粘板岩、緑色片岩、緑泥片岩、結晶片岩、緑色千枚岩、珪質頁岩、頁岩、凝灰岩などがあり、中でも粘板岩と緑色片岩の使用される頻度数が最も高い。石材の分類名については、肉眼観察を行った分析者によって若干異なる場合がみられるが、緑色片岩、緑泥片岩、緑色千枚岩は同類と見なすことが可能である。たとえば具体例として1982年に示された朝日遺跡の25点を例にとってみると、緑色千枚岩9点、凝灰質頁岩源千枚岩6点、凝灰質砂岩3点、頁岩3点、珪質頁岩3点に分類されていて（加藤・諏訪、1982）、片岩や頁岩系統の岩石が主体をなしている。磨製石包丁の製作が、素材に関するきわめて強い選択性を示し、共通性を生み出している点は、これまで以上に強調されてもよい。

緑色片岩の産出地は、伊勢湾周辺地域では豊川以南の外帯に位置している。今までのところ、遺跡から出土した石包丁の原材が、具体的にどの地点で得られたのかは明らかとなっていない。仮に当地域の外帯の緑色片岩を素材にしているのであるならば、磨製石包丁の分布希薄な地域から入手していることになるから、入手をめぐる新たな問題を考えなければならないことになる。しかも、福岡県立岩遺跡や大阪府池上遺跡、奈良県唐古遺跡のような製作跡を示す遺構、あるいは剝片類の濃密な分布に表された製作に関わる状況証拠などは、納所遺跡においても、朝日遺跡においても検出されてはいない。しかし、製作工程の仕上げ段階、つまり「研磨」工程のみを示しているのかも知れず、さらに、未製品の出土は遺跡現地においてなんらかの製作・加工が行われていたことを示唆している。

Ⅱ－4．打製石包丁と横刃形石器の問題

定型化した打製石包丁の出土が少例である点は、二、三の例外的地域を含んでいる西日本地域とも共通しており、必ずしも伊勢湾周辺地域を特徴づける要素になっているとはいえない。調査報告書等で打製と記されていたり、あるいは一見して打製と見受けられる資料の中でも打製石包丁には該当しない例が含まれているので、その出土事例は報告書記載例よりもさらに少なくなると考えられる。たとえば岐阜県半布里遺跡の第4図9の資料（岐阜県教委、1981）は外湾刃丸背形態の未製品

とも横刃形石器とも見受けられるものであるが、紐用の穿孔も両端のえぐりも見られないことからすれば、打製石包丁に含められうるものではない。また、岐阜県根本遺跡の図15－41の資料（岐阜県教委・多治見市教委、1991）や岐阜県牧野小山遺跡出土の２点(岐阜県教委・美濃加茂市教委、1973)も紐用の穿孔またはえぐりが認められず定型を保持してはいないので、刃器の部類に加えた方がよいと考えられる。

こうしてみると、現在までに当地域で確認されている打製石包丁は、三重県永井遺跡の資料のみとなる。ここでは２点の打製石包丁が前期の溝から相当量の遠賀川式の壺・甕類と少量の大洞A′式系の鉢・条痕紋の甕とに混じって出土している。いずれも頁岩製で、左右両端に紐かけ用のえぐりがみられる。２点とも石毛分類のA形態に分類され、周縁に小剥離による調整痕を持っていて、２点の内の１点は明瞭な片刃に仕上げられている。

えぐり入り打製石包丁は、西日本では宮崎県や岡山県南部、香川県、愛媛県、徳島県などにみられ、また東日本では長野県伊那谷地域を中心に弥生時代中期から古墳時代初頭にかけて盛行したものであるが、少なくとも当地域では空間的な広がりを持たず、しかも時間的にもその後の展開を見せずに単発的に終ってしまったようである。永井遺跡では磨製石包丁が１点もみられず、また典型的な大陸系磨製石器類についても、扁平片刃石斧・柱状片刃石斧が中期の方形周溝墓などから少量出土しているにすぎないため、打製石包丁の系譜は、あるいは条痕紋土器や大洞系土器の方に求められるべきかもしれない。資料増加を待って検討されるべき事項である。

いっぽう、定型化されていない刃器もいくつかの遺跡から発見されている。それらは不定形刃器、横刃形石器として分類されることが多く、スクレーパーとして一括されている場合もある。ところで、鋭利な刃部を持つそれら（ここでは細かい形態分類には拘泥せずに、不定形刃器、横刃形石器、スクレーパー、刃器と呼ばれている一群を横刃形石器として扱っておく）の使用法については様々な論議がある。『朝日遺跡Ⅳ』(1993) の中で、同遺跡から出土した刃部に光沢痕の認められる29点の資料（ここでは「粗製剝片石器」としている）について顕微鏡観察を行った町田勝則（1993）によれば、調整加工された横刃形ｂ類とえぐり入形ｃ類（有肩扇状形石器）にはイネ科植物を切る作業に用いられた痕跡が認められるとされ、これによりそれらは農業関連の道具であったと捉えられている。また、このような刃器の中には、他に叩いたり、しごいたりする作業に使用されたものや、作業対象物が植物のみに限定されるものではなく、木・骨・石であった可能性があることも指摘されている。これはある意味で、横刃形石器にはいくつかの機能的要素が形態としては未分化のままの状態で含まれていることを表している。換言すれば、それらは製作が簡単であるが故に、多機能がまだ形態として細分・特殊化してはいない段階にある道具であるということができる。朝日遺跡においては、1982年に刊行された報告書の中で提示されている38点の横刃形石器のうちにも、刃部に光沢痕が認められるものがいくつかあると報告されている。このような刃部に確認される使用痕については、磨製・打製石包丁を含めた長野県恒川遺跡群の資料を取り扱った御堂島正の一連の分析研究があり、その中で、磨製石包丁、「扶入打製石包丁」、「横刃型石包丁」ともに、イネ科草本を穂から刈り取る作業に用いられたものであることを明らかにしている。これに対し、山田しょう(1987)や斎野（1993）は、宮城県富沢遺跡の資料などから、「大型直縁刃石器」と呼ぶ刃器はイネ科植物などの根刈りも含めた切断に機能したとの指摘を行っている。

そうしてみると、全ての資料に対して分析検討が加えられている現状であるとは言えないものの、朝日遺跡出土例にみられるように、伊勢湾周辺地域から発見された弥生時代の横刃形石器の相当部分が、農耕作業における収穫具として使用されていた可能性は高いと見ることができる。このような観点に立って改めて当地域における横刃形石器の出土状況をながめてみると、先の永井遺跡では11点、三重県杉垣内遺跡では数点、愛知県元屋敷遺跡では８点、山中遺跡でも４点の横刃形石器の出土が認められる。既述のように、朝日遺跡では1982年刊の報告書段階で38点、1993年刊の報告書に示された粗製剥片石器のうちで刃部に光沢を持つもののみに限ってみても27点の出土がある。さらに同遺跡に程近い愛知県阿弥陀寺遺跡でも７点ほどが確認されている。この他に、調査時点で残念ながら意識に上らずに記録化されなかった剥片類も幾つかあるだろう。したがって、稲の収穫作業の中でこれらの刃器類が磨製石包丁の僅少さを補う従属的かつ補完的な道具として使用されていたのではなく、むしろ主要道具のひとつとしての役割を担っていたであろうことは充分に想定されるわけである。

Ⅲ．磨製石包丁の象徴性

このような地域的状況を踏まえて、次に磨製石包丁に関する一、二の問題点について論じてみたいと考える。論点は、主として数量の僅少さに内在する日常的取り扱いの問題、及び社会の中での所有をめぐる集団相互間の位置づけの問題についての２点である。

Ⅲ－１．儀礼と実用、聖と俗

伊勢湾周辺地域の弥生時代集落から発見される磨製石包丁の量が極めて少ないことは、以上に明らかにした通りで、ほとんどが１、２点の出土に限られている。むしろ出土しない弥生時代集落の方が多いような状況ですらある。最多量の出土をみた朝日遺跡においても、出土総点数を調査面積で徐すれば100㎡当たり0.096点、また確認されている竪穴建物棟数で除しても１棟当たり0.19点となって、決して高い数値を示しているわけではない。まして、13点の出土をみている岡島遺跡においては100㎡当たり0.05点となって、さらに低い値を示すことになる。

このような量的な僅少性という問題については、多数の弥生時代遺跡から磨製石包丁が検出されている西日本地域においても同様の傾向として窺われていて、大阪府亀井遺跡や池上曽根遺跡、高宮八丁遺跡、香川県鴨部河田遺跡のように数百点に上る出土のみられる方がむしろ例外的事例であるといわなければならない。

すると、このような現象を理解するためには、磨製石包丁についての新たな解釈が求められることになる。私は、かかる僅少さの理由は磨製石包丁の収穫段階での使用形態そのものに関連していると考える。すなわち、磨製の石包丁は収穫時において儀礼的に用いられたのみであり、実用的・日常的な収穫具としてはいわゆる横刃形石器の類の刃器が使用されていたと解釈するものである。つまり、磨製石包丁は、稲作農民にとって最も緊張感が高まっていく稲作農耕最後の工程であるところの収穫場面において象徴儀礼用に限定して用いられたと考えられるのであり、おそらくそれは神への感謝の意味を込めた所作として執り行われたものであろう。あるいは、初穂を祀る穀霊祭祀に係るものであったかも知れない（春成、1982）。

この象徴性の究極に大形の磨製石包丁がある。たとえば、朝日遺跡から発見された１点を例にとってみよう。これは幅13cm×長さ25cmの大形品であり、いわばバカ包丁とでも命名したいような製品である。したがって、平均的な大きさの石包丁と同じような形態で掌中に収めて使用されたとは

とうてい考えられないものである。だがしかし、紐用の穿孔は約束事として確実に行われている。紐用穿孔が施されているのは、納所遺跡、杉垣内遺跡、山篭遺跡あるいは福井県吉河遺跡出土の大形磨製石包丁の場合でも同じである。このような大形品は明らかに非実用品と考えられ、儀礼的な場合にのみ使用されたであろうことを最もよく示している。

石包丁にみられる象徴性に関しては、すでに早い段階に石毛が東南アジアの島々の地域の民俗事例として、「儀礼的な収穫にさいしては、鎌は使用せず、穂摘具で穂の直下よりの収穫を行なったり、初穂を供物として使用するときには、かならず穂を単位として供える」(石毛、1968A) 例を紹介しているし、また佐川正敏・青山和夫も中国雲南省怒江地区独龍族の民俗事例として陳振中の見解を引きながら、「鉄鋌を実用しながら石包丁を穀物倉の中にしまい（石包丁や石斧には福が宿り、それが穀物に影響して食に不自由しないとされる）伝世していることから、古期にもそうしたことがあったのではないかと推定している」(佐川・青山、1986)。前者は儀礼に際しての穂摘具の使用法を示し、いっぽう後者は石包丁の象徴性を示している。

東アジアの民俗事例が直接的にわが国の弥生時代にも当てはまるというわけではないが、磨製石包丁の使用法と儀礼は大陸系磨製石器の一群に含まれる形で、最古の稲作農耕の段階からわが国に到来してきており、基本的には遠賀川式土器とセットになって東日本地域にまで広がっていったと考えるわけである。

したがって、以上から、磨製石包丁は聖的・非日常的なものを、いっぽう、打製の横刃形石器は俗的・日常的なものを象徴し、弥生時代人の精神構造の一端が現れていると考える。そこで仮に、磨製石包丁を稲の実際的な収穫行為の中における〈周縁〉、いっぽう刃器類を〈中心〉として位置づけるならば、池上嘉彦の次のような考え方はある程度参考になる。すなわち、

「〈中心〉が秩序化が完全で安定しているのに対して、〈周縁〉は秩序化が不完全で不安定である。〈中心〉がその〈日常性〉の故に〈優位〉に立ち、〈無徴〉であるのに対し、〈周縁〉はその〈非日常性〉の故に〈劣性〉で、〈有徴〉である。(略)〈中心〉は何かが起こっていて実は「新しい」ことは何も起こっていない場であり、沈滞へ傾く。一方、〈周縁〉は真の意味で「新しいこと」の起こる場であり、活況を呈する。」(池上、1984)

磨製石包丁は穂摘み作業を象徴する道具でありながら、実行為においてはそれを用いた作業は周縁的であり、それが故に集落・集団の中に活況と緊張感とをもたらした当のものだったのである。以上をまとめてみると、次のようになる。

磨製石包丁＝〈摘む〉
　　聖的・非日常的・儀礼的
　　機能的〈周縁〉

横刃形刃器＝〈切る（刈る）〉
　　俗的・日常的・実務的
　　機能的〈中心〉

人間の意識活動にからめていえば、前者は〈神話的世界〉を生み、いっぽう後者は〈現実的世界〉である。

このようにみてくると、関東を中心とする東日本地域において殆どその出土がみられないことの理由について、弥生中期中ごろ以降に木製穂摘具が普及していたのではないかと想定する野本(1989)の考え方や、長野県恒川遺跡群の資料を基にして弥生後期後半を境に有孔磨製石包丁からえぐり入り打製石包丁へと置き代わっていったのではないかとする御堂島（1991）の見解には、にわかに賛

同しがたいものがある。遠賀川式土器を主体とする集団の進出がみられなかったが故に、磨製石包丁の普及もまた一般的となり得ず、使用痕研究から明らかにされたように、中期以降に、実務的には刃器類が収穫具としての役割を果たしていたと考えた方がより合理的であろう。

Ⅲ－２．機能の変換、形態の転換

磨製石包丁を儀礼的、象徴性の強い道具として捉えた場合、打製製品の位置づけはどのように理解されるべきか、この点についても若干の解体を行ってみる。

機能変換として捉えられるべき資料に穂摘具としての打製刃器類がある。本来的には打製のスクレーパーとしていくつかの機能が内在し、それが穂摘具のみの機能へと変換・特殊化していったのではないかと考えてきたのであるが、この点に関してはなお検討すべき諸点が残されている。たとえば、永井遺跡から出土した前期の両端えぐり入り打製石包丁を取り上げてみる。これは、形態的には長野県伊那谷を中心として弥生中期以降に多数製作された打製石包丁と同類であることを示している。２点のみの出土で、共伴した土器が遠賀川式土器の系統ではなく縄文系土器であったのではないかということは先に暗示的に述べた通りであるが、そうであるとすると、水田稲作農耕集団と接触しそこに取り込まれることによって、縄文期から存続してきた刃器の類が穂刈り具へと機能変換していった結果を表しているかも知れないわけである。もちろんこれに対して、西日本地域から稲作と共にもたらされたことも十分に想定されよう。今のところ実証的証明はつけられていない。

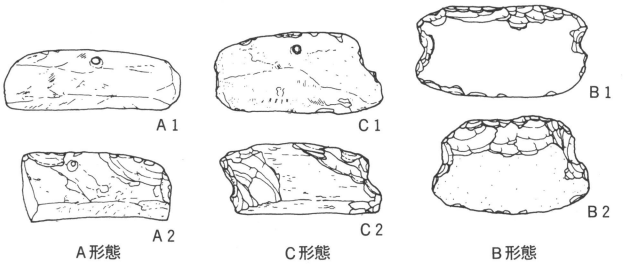
しかもこの問題は、さらに飛躍して時期を遡り、地域的にも広がりを持っていく可能性を示している。当地域からすこぶる離れている地域の資料ではあるが、高木正文（1980）は九州地方の縄文後・晩期の遺跡から得られた収穫石器としての打製石包丁と打製石鎌を集成し、それらはすでに縄文後期後半から中九州において畑作農耕が開始されていたことを示し、水稲栽培開始以後も中九州山岳地帯では両端抉入りの石包丁が畑作用道具として使用されていたであろうと論じている。藤尾慎一郎（1993）もこの考え方に基づきながら、該期における朝鮮畑作文化の情報伝播を想定する。ここからは、弥生期において磨製石包丁と両端抉入り石包丁とが、それぞれ水稲栽培と畑作という相異なった使用形態で展開していたことが類型的に導き出される。いっぽう、間壁忠彦（1985）は、瀬戸内沿岸地域に出現する打製石包丁の時期は弥生中期であり、前期から見られた磨製石包丁にとって代っていったと述べている。

だが、紐かけの概念と方法からみても、両端に抉を持つ形態は磨製の有孔形態とは全く異なっている。したがって、石毛分類のＡ形態がすでに縄文後期ごろには大陸から九州地域にやってきていて（石毛によれば、石包丁は元来中国大陸では粟の穂摘具として出現していた）、続いてもたらされた大陸系磨製石器の一群に乗じて瀬戸内や伊那谷などの一部の地域へと伝わっていったという想定が成り立つかも知れない。そしてこうした地域では、高木の考えとは異なった、稲の穂摘具へと機能展開していく抉入り打製石包丁の別類型が考えられるのかも知れない。しかしながら、この推論は資料不足も手伝ってやや実証性に欠ける。本稿ではこのことを論証していく力量を持ち合わせてはいないので、ここでは石器の機能転換を考える場合の一素材の提示としてとどめておきたい。

これに対して、形態転換を示す最もよい例は、抉入り磨製石包丁の出現に表れている。伊勢湾周辺地域からは１例も発見されてはいないが、長野県内では先に示した恒川遺跡群や倉平遺跡からの出土が知られる。それらは、森本の形態分類を使用すれば長方形の平面形を呈した直刃直背形態に

分類されるものばかりである。稀に中央上位に単孔が穿たれている例が認められるが、ほとんどが無孔である。両端から抉が刻み込まれ、両面に研磨が施されている。上端周縁が剝離調整のままで、研磨が及んではいない資料も多い。

ここで、磨製石包丁をＡ形態（磨製直刃直背形態石包丁）、抉入り打製刃器をＢ形態（御堂島



第３図　石包丁と刃器の形態転換（長野県恒川遺跡群の資料より作成）

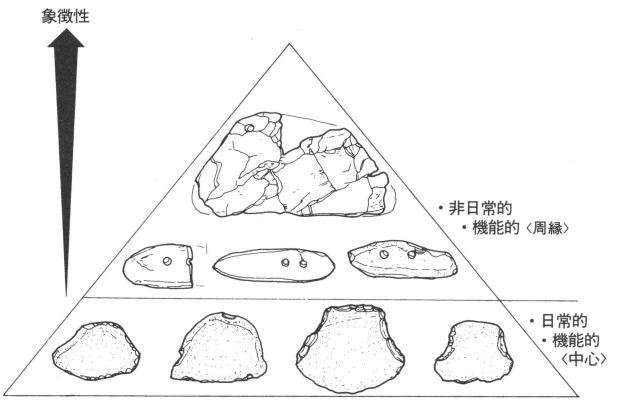
のいう抉入り打製石包丁)、抉入り磨製石包丁をＣ形態として、これら一群の資料の出自を考えてみると、Ｃ形態はＢ形態の磨製化、あるいはＡ形態の抉入り化として捉えることができる。すなわち「研磨」と「穿孔」の要素はＡ形態の磨製石包丁から、いっぽう「抉」の要素はＢ形態から由来しているということができる。たとえば、Ｃ１では有孔をＡ１から、また両端の抉をＢ１から受けており、Ｃ２では刃部研磨をＡ２から、そして両端の抉をＢ１、Ｂ２から受けている。このため、「紐かけ」という属性からみると、Ｃ１では有孔と抉が同時に施されることになって、同一機能が重なった重複形態となってしまっている。これらは形態の相互転換の１例ともみられようが、無孔製品が圧倒的に多い状況から考えると、相互と言うよりもむしろ抉入りの打製刃器が、伝播して来た磨製石包丁から「研磨」の要素を吸収して形態転換した結果であるとみた方がよい。だが、恒川遺跡群の場合は石材が有孔磨製石包丁と共通する例も多いとされているので、ことはそれほど単純ではないようである。どちらの事例においてもアカルチュレーションの物質的一断面をあらわしているといえる。

Ⅲ－３．地域社会の中の磨製石包丁

石包丁を「属人器」として捉える考え方がある。これは、使用痕の分布状況から個人の占有性の高さが窺われるとする松山聡（1992）の指摘であるが、磨製石包丁の出土数が極めて少ない伊勢湾周辺地域の弥生時代集落にあっては、この「属人器」の概念は先に述べた儀礼的用いられ方とも絡めて、いっそう特殊化して捉えた方がいいようである。

ここで、ひとつの集落の中での磨製石包丁、横刃形石器を含めた穂摘具の位置づけをモデル化してみると、第４図のようになる。

これは、象徴性が最も高いとみられる大形磨製石包丁を頂点とし、実用的な横刃形石器を底辺と



第４図　愛知県朝日遺跡における穂摘･穂刈り具の位置関係モデル図

した一種の重層構造である。ここでは、稲の穂を摘むという行為は記号として解釈され、また、〈日常性〉と〈非日常性〉の２項は対立ではなく、層として位置づけられる。象徴を中核に置いてこの三角形をみると、池上の考え方を引いた先の〈中心〉と〈周縁〉の関係は逆立ちしていることになるが、打製刃器類の使用こそが〈日常性〉であるわけだから、逆立ち現象はまさに〈非日常性〉をあらわしている。

さらにこの三角形を１集落から地域社会にまで拡大してみよう。すると、おもに弥生中期を中心

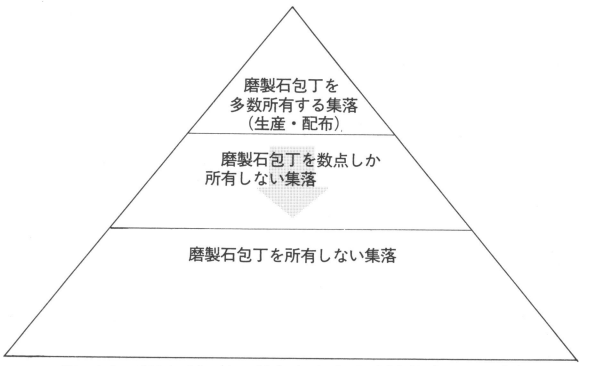
とする時期の集落は次の３種類に区分される。

１．磨製石包丁を大量に出土する集落、

２．１、２点しか出土しない集落、

３．全く出土しない集落

そしてそれらを第４図の三角形モデルと同じように、重層化した構造として捉えることも可能になる（第５図）。この区分は、集落の規模・存続期



第５図　磨製石包丁の所有をめぐる地域社会モデル図

間の長短による類別とも概ね一致している。そしてさらに、石材の共通性の問題を加えて考えてみると、磨製石包丁が上位の集落において製作され、そこから配布・分配された可能性が強くなる。たとえば、名古屋城三の丸遺跡や森南遺跡などは広い意味で朝日遺跡からの分村であり、磨製石包丁もそこから配布されたのではないかと考えられるわけである。大阪府亀井遺跡や池上曽根遺跡、高宮八丁遺跡、香川県鴨部河田遺跡のように大量の磨製石包丁を出土する遺跡は、この三角形の最上位に位置づけれるものである。

磨製石包丁の製作・供給関係については、すでに斎野（1991）が東北地方に分布する磨製石包丁を取り上げて、それらは製作地の一つである福島県天神沢遺跡から供給されたのではないかとし、地域間の交易関係として捉えるべき必要性を提起している。ここでさらに、出土（所有）と非出土（非所有）の現象を地域集団の重層性あるいは母村と分村を表す関係としてみていくならば、地域における集落間構造がより明瞭になってくるといえるだろう。

さらにこの問題について、石器組成に基づき弥生時代の生業パターンの地域的類型を提唱している酒井龍一（1986、1989）の見解と絡めて考えてみる。酒井によれば、磨製石包丁の出土量が少なく伐採用石斧の比率が高い伊勢湾周辺地域では、樹木伐採活動が主体であったと考えられている。これに対して、比較的磨製石包丁の出土が多い畿内地域の弥生時代集落は、穂摘み活動主体型として捉えられている。だが、この類型区分は余りにも合理的すぎるように思われる。Ⅲ－１で述べたように、横刃形石器類が穂刈り具としての役割を果たしていたと考えるならば、磨製石包丁の多寡は必ずしも生業パターンの違いを反映しているものではなく、ひとつの集団・地域の中での同一機能に基づいた石器形態の相違を表しているにすぎないと理解されるのである。

Ⅳ．おわりに

これまでに述べてきたことがらをまとめると、以下のようになる。

(1)　伊勢湾周辺地域の穂刈り具のうち磨製石包丁は、前期から後期前半まで使用されているが、中期に用いられたものが最も多い。

(2)　朝日遺跡の横刃形石器に認められた使用痕から、それらも穂刈り具として用いられた可能性の高いことが判明したが、このことは東日本地域の弥生時代集落で発見される打製刃器類全体にまで拡大して考えることができる。

(3)　磨製石包丁は稲作農耕社会の人々の精神活動を象徴する道具の一つとして理解することができる。このため、その出土点数の僅少性からして、磨製石包丁はひとつの集落の中での収穫儀礼的な場面で用いられ、いっぽうの刃器類は実際的・機能的な道具として使用されていたとみられる。

(4)　伊勢湾周辺地域で認められる磨製石包丁出土の有無・多寡の状況は、地域集団（集落）の間の

社会的重層関係を反映している。

以上、伊勢湾周辺地域の磨製石包丁の出土状況に基準をすえて、そこから派生する社会的な構造と物質文化の中に対象化された象徴性や人間精神の問題にまで触れてきた。資料解析・論理展開ともに不十分な面が多々あるが、課題としておきたい。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

本稿を草するに当り、名古屋市見晴台考古資料館川合剛、岐阜県教育委員会大熊厚志、愛知県埋蔵文化財センター石黒立人の各氏から有益な御教示を得た。記して謝辞とする。

引用文献

池上嘉彦　1984　『記号論への招待』　岩波書店

石毛直道　1968Ａ　「日本稲作の系譜（上)」『史林』51－5　130～150頁

〃　1968Ｂ　「日本稲作の系譜（下)」『史林』51－6　96～17頁

加藤安信・諏訪兼位　1982　「朝日遺跡出土石製品の岩質と特色」『朝日遺跡Ｉ』　愛知県教育委員会　276～281頁

紅村　弘　1984　『東海の先史遺跡　総括編復刻版』

小林行雄　1937　「石包丁」『考古学』8－7　299～311頁

斎野裕彦　1991　「東日本への稲作伝播を考える」『考古学ジャーナル』337　19～24頁

〃　1993　「弥生時代の大型直縁刃石器(上)」『大阪府弥生文化博物館研究報告』2　85～109頁

酒井龍一　1974　「石包丁の生産と消費をめぐる二つのモデル」『考古学研究』21－2

〃　1986　「石器組成からみた弥生人の生業行動パターン」『文化財學報』四　19～37頁

〃　1989　「初期農耕開拓活動の諸形態」『文化財學報』七　1～15頁

佐川正敏・青山和夫　1986　「中国の石包丁」『考古学ジャーナル』260　6～10頁

下條信行　1980　「東アジアにおける外湾刃石包丁の展開」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攻』193～213頁

高木正文　1980　「九州縄文時代の収穫用石器」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攻』　69～108頁

野本孝明　1989　「東日本の磨製石包丁」『國學院大学考古学資料館紀要』5　41～54頁

春成秀爾　1982　「銅鐸の時代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集　1～48頁

藤尾慎一郎　1993　「主業からみた縄文から弥生」『国立歴史民俗博物館研究報告』第48集　1～64頁

間壁忠彦　1985　「7．打製石包丁」『弥生文化の研究5』108～111頁

松山　聡　1992　「石包丁の使用痕」『弥生時代の

石器』第６分冊　第31回埋蔵文化財研究集会発表要旨　14～19頁
御堂島正　1989Ａ　「有肩扇状石器の使用痕分析」『古代文化』41－３　30～43頁
〃　1989Ｂ　「『抉入打製石包丁』の使用痕分析」『古代文化』41－６　19～27頁
〃　1989Ｃ　「『抉入打製石包丁』の使用法」『古代文化』41－８　１～15頁
〃　1990　「『横刃型石包丁』の使用痕分析」『古代文化』42－１　10～20頁
〃　1991　「磨製石包丁の使用痕分析」『古代文化』43－11　26～35頁
〃　1993　「日本における使用痕研究の展開」『神奈川県の考古学の問題点とその展望』　神奈川県立埋蔵文化財センター　28～37頁
町田勝則　1993　「３．粗製剥片石器の使用痕について」『朝日遺跡Ⅳ』　愛知県埋蔵文化財センター
森下英治　1992　「中四国における弥生石器のおわり」『弥生時代の石器』第６分冊　第31回埋蔵文化財研究集会発表要旨　58～64頁
森本六爾　1934　「石包丁の諸形態と分布」『日本原始農業新論』
山田しょう　1987　「弥生時代の石器の使用痕分析」『富沢』　仙台市教育委員会　461～468頁

参考文献

『永井遺跡発掘調査報告』　1973　四日市市教育委員会
『納所遺跡』　1980　三重県教育委員会
『昭和61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財調査報告Ｉ』　1989　三重県教育委員会
『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概要Ⅱ』　1990　三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター
『半布里遺跡調査概報(1)』　1981　岐阜県教育委員会
『根本遺跡』　1991　岐阜県教育委員会・多治見市教育委員会
『牧野小山遺跡』　1973　岐阜県教育委員会・美濃加茂市教育委員会
『名古屋城三の丸遺跡(1)』　1990　愛知県埋蔵文化財センター
『山中遺跡』　1992　愛知県埋蔵文化財センター
『貝殻山貝塚調査報告』　1972　愛知県教育委員会
『朝日遺跡Ｉ・Ⅱ』　1982　愛知県教育委員会
『朝日遺跡Ⅳ』　1993　愛知県埋蔵文化財センター
『阿弥陀寺遺跡』　1990　愛知県埋蔵文化財センター
『森南遺跡』　1990　愛知県甚目寺町教育委員会
『岡島遺跡』　1990　愛知県埋蔵文化財センター
『岡島遺跡・不馬入遺跡』　1993　愛知県埋蔵文化財センター
『瓜郷遺跡』　1963　豊橋市教育委員会
『篠東遺跡調査報告書』　1960・61　小坂井町教育委員会
『弥生時代の石器』第１～６分冊　1992　埋蔵文化財研究会関西世話人会